

8. 総括

本年度の調査検討業務は、前年度掲げたOODA ループにおけるビジョンの検討、社会実験の検討をもとに社会実験を行い、検証し、得られた知見をさらに次につなげるフィードバックをまとめることが求められている。

和歌山の水辺とまちに必要な政策を策定するための4つのステップとそのループ

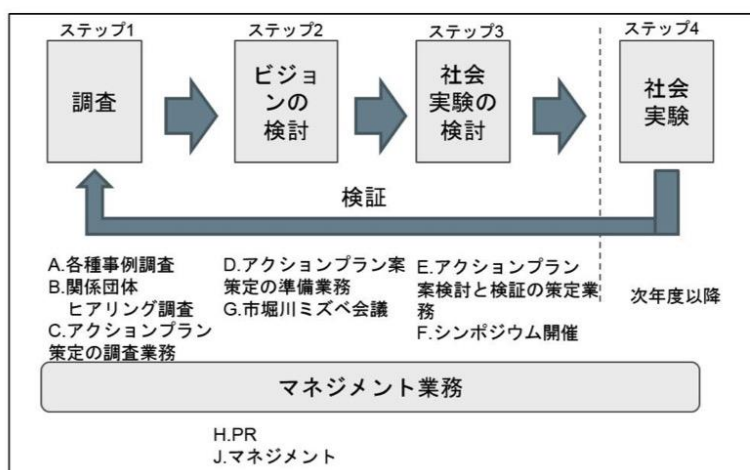


図1.業務の全体構造

- ステップ1. 調査: 現状把握、他の事例の調査、市内のステークホルダー調査
 ステップ2. ビジョンの検討: アクションプラン準備、検討
 ステップ3. 社会実験の策定: 社会実験のアクションプランと検証の策定
 ステップ4. 社会実験
 →ステップ1. 調査にもどり、また繰り返す

実際に行ってみないとわからない知見や、事前に予見できなかったこと、創造されていたけど実証されたこと、逆に想像とかなり異なっており厳しい現実が突きつけられる状況も生まれた。

これら新しい知見をもとに、今後水辺のまちづくりの方向性はどのように進むべきなのか見えてきた。まずやってみることでわかる知見には大変価値があることがわかり、そもそもこの手法自体の有効性が実証されたと言える。

その上で、この社会実験を通じた調査を行うにあたり、民間のボランティアの方々に多大なるご支援とご協力いただいたことをあらためて報告し、彼らの協力なしにはこれらの重要な知見を得ることができなかったことを記しておく。

この場を借りて、参加いただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

8.1. 社会実験でわかった、水辺の楽しさ、気持ち良さ

水辺でお弁当を食べたり、カフェを楽しんだり、芝生に寝転んだり、ハンモックでお昼寝したり、水辺空間で過ごす時間の気持ちよさや、SUP やカヌーに乗って楽しんだり、様々なイベントに参加することができた社会実験であった。市堀川周辺でこのような空間はとても貴重である。

→水辺は気持ちがいい。今回実験した 9-10 月はすでに寒くていろいろ都合が悪かった面があったが、もっと期間が延びればたくさんのひとに、外部空間と水のそばであることを感じてもらえる。そういった場所が和歌山の中心市街地に皆無であるので、できれば価値がある。

一方、荒天時や夜間のシェルターの重要さも確認できた。

8.2. 社会実験でわかった、水辺を居場所にするによってわかったこと

イルミネーションにはじめて気が付いたというひとがいたり、いつも同じところで同じように過ごしたりされる方々がいる。毎日掃除することで、どんな方がどんな風にこの空間を利用しているのかを感じることができた。

→水辺はいままでも気持ちいい空間であったかもしれないが、居場所としての居心地の良さをみにつけて、座って長い時間滞在してくれるひとがうまれることによって、まちの見方が変わる、ということがわかった。

8.3. 社会実験でわかった、和歌山の中心市街地のポテンシャル

社会実験実施にあたり、様々なタスクフォースが立ち上がった。中心市街地を流れる市堀川周辺には市駅前に水辺座や、酒蔵世界一統があり、ミートビル、ヌメロオンセ、カニ道楽、喫茶店、居酒屋、料亭、ラーメン屋、ぶらくり丁といった飲食店やコンテンツがある。これらのコンテンツを生かした企画がたちあがり、オープンカフェやマルシェイベント、舟運実験等が実施された。

企画段階でまだ実施できていないが、世界一統さんの酒蔵を使ったツーリズムやそこを起点にした舟運事業等を開発し実施していくことは、域外からの利用を増やす上で最も重要なコンテンツになりうるであろう。

→中心市街地をつらぬくように水辺があることは、中心市街地再生を考える上でとても重要。

中心部にあることで、ひとが集まりやすいことはまだ確かである。そしてさまざまな出会いを通して、あらたなコンテンツを作ってみようという機運が高められることがわかり、水辺の広場がそのポテンシャルを最大に活かした。

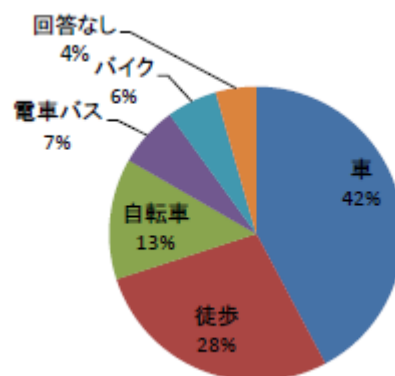
どのような利用方法にせよ、水辺があることを生かしたまちのコンテンツのつくりかたが、これからの中心市街地再生のキーになる。

8.4. 社会実験でわかった、中心市街地の現実と賑わいのあり方

会場運営で感じた、人通りのなさ、という現実。中心市街地では平日の人口が比較的多く、イベントのない休日や祝日はひっそりとしている。これは賑わいとか、商売とかを抜きにして考えると、ゆったり時間が流れていると感じることもできるが、社会実験中の出店者にとっては、厳しい現実であった。目的としてきてくれるほどのコンテンツとそのPRが賑わいづくりには不可欠である。

また、これまでかつての中心市街地としての機能が失われていったことで、中心市街地が住宅地として利用されているという現実もわかった。ただ単に賑わえばいいということではなく、住んでいる人たちの環境向上に繋がらなければならないことも音楽イベントのクレームがあったことを通してわかり、課題として継続的に取り組み、どのような中心市街地になったらいいのかという大きな課題解決の必要性を感じた。

図表 2-4-7 ワカリバ利用者調査：交通機関



→中心市街地で行われるイベントであるということ、ここを目的地にしなくてもふらっと訪れるような人が現れるだろうと楽観してはじめた社会実験だったが、現実には厳しく、歩行者がまったくいないし、車でおるひとにも寄ってくれるということがなかった。

京橋駐車場近辺の賑わいの現実を把握し、賑わいをつくるとしても、『目的地になる』コンテンツ、事業を作る必要があると感じた。どのような事業がその『目的地になる』コンテンツになり得るかは、事業主のアイデア次第である。

→中心市街地が今後どのようなコンテンツを優先させるかという幅広い議論が必要。住宅はそのなかでどのような価値を提供するのがいいのか、大きく議論し、そのあり方を模索する必要がある。

8.5. 公共空間活用における、人手間の重要さ

公共空間活用の趣旨を理解していただき、面白がってくれるが何をして良いのかわからない、何かできたら良いな、と興味を持っていただける方はかなりいたが実際に企画を起こし実施していただけるまでは、何度も打ち合わせをし、プロジェクト側のスタッフが企画を進めないと実施に至らない案件も多かった。

→魅力的な空間をつくっただけでは人は使ってくれない。営業して、企画協力して差し上げることでようやくイベントとして世の中にだせる。しかも企画しただけではお客さんは来てくれないので、PR、広報に手間をかける必要があった。SNSを通して発信し、魅力あるイベントへの理解をしてもらうためには、適切な人材を充てなければならない。

単に樹木の剪定や清掃管理にとどまらず、いかにして多くの人々に使いこなしてもらおうかということ営業して魅力を知ってもらい、その企画を知らしめる能力ある人が関わることの重要さを実感した。

8.6. 社会実験でわかった、事業主の重要さ

期間中、常設の飲食店を営業し続けてくれた WASSUP の大江亮輔氏には感謝である。人通りの少ないエリアでの飲食店営業にも関わらず、ある一定の集客が作れたこと。期間後半は常連客ができるまでになっていた。事業主がこの川のポテンシャルを認め熱い思いを持って取り組んでくれたこと、ここでの営業を楽しんでくれたことが結果につながったのであろう。

→魅力的な空間をつくっただけでは人は使ってくれない。その空間を使いこなしてサービスを提供してくれる事業者がいてくればはじめて、市民が使いこなすことができる。サービスを提供してくれる事業者が思いをもって参加してくださることで、事業性がなくても実験が成立する。もし社会実験から実施フェーズに移行したとしても、事業主の思いをどう受け止めることができるかが、空間管理者の力量が問われるところである。

8.7. 社会実験でわかった、同時多発的取り組みの重要さ

10月からのイベントを一定期間おこなっただけでは、中心市街地を劇的に変えることはむずかしいことがわかった。

しかしながら、たくさんの人が関わったことで、水辺に対する理解と中心市街地の置かれている現状に対する理解は深まったものと考えられる。これは一事業者の一事業では成しとげることができない成果である。もし、和歌山の課題を解決するのであれば、もっと多元的にたくさんの人々の取り組みが連動し、ともに盛り上げる状況を作る必要があるのではないだろうか。その動きの連動感が強ければ強いほど、人々の関心度合いは高まるのであろう。

→今回、一事業者ではなくたくさんの事業者が行政と連動してやってみることで、一定の成果をあげることができた。このような取り組みがあと 2~3 別の場所で同時多発的にうまれると、和歌山の中心市街地に対するイメージはがらっと変わるのではないかと感じた。

8.8. 社会実験でわかった、分野を超えた取り組みの必要性

水辺を活かしたまちづくりは、これを民間事業者が実施することで、さまざまな波及効果があるのではないかとと思われる。例えば、舟運実験を通してわかったのは、この舟運は域内の交通利用より域外からのかたの利用を促すための観光事業者や観光政策と繋がる必要があるのではないかと考えるに至った。これは、水辺を活かしたまちづくりがほかの行政的所掌へ社会実験の成果が波及するというに他ならない。

舟運を実現しようとする、事業者が供給する船の置き場の問題が発生することが判明した。置き場がないために事業者が舟運事業への参入に障壁を感じているということがわかり、それは、今回の社会実験の範囲の外で、置き場を確保するということへの分野を超えた取り組みの必要性を物語っている。

京橋広場のあり方とも連動して、道路の路側帯幅員が道路全体の幅員に裂かれている自動車交通の幅にくらべて、非常に狭く、その結果運営上安全配慮に多大な労力を割かなければならなかったが、そもそもこの道路構造を変えることで、水辺の環境がよくなり、賑わいにつながるのであれば、都市道路政策との連動も必要になる。

このように、今年度の実験で、他の行政政策との連動が図れれば、もっと水辺は活性するはずだという知見が得られることができた。この取り組みを通して、分野を超えた取り組みに発展し、和歌山が魅力を世界中に発信する状況につながることを望む。

→行政の縦割りを超えて価値をつくる必要性を感じた。連動してあらたな価値をつくる取り組みへの発展が望まれる。

8.9. にわとりとたまごの理論をちょっとだけ超える取り組みの必要性

今回の社会実験をとおして、やはり多くの人から水質改善の必要性に対する意見が聞かれた。水辺交流会で小学生からのプレゼンテーションもあり、改善すべき課題として、今回の社会実験を通してその声は大きくなったように感じる。

この水質改善の取り組みは、原因がたくさんあり、その責任者はたくさんの数にのぼる。なにかひとつの取り組みや政策を行ったからといって、すぐに改善するものでもない。ましてや、全市民的な合意がなければ、原因となっている下水整備や越流水（CSO）の対策を行う財源確保にはいたらず、なにかをおこなえば必ず綺麗になるということではないということはこれまでの水質改善に対する先人たちの取り組みをみても明らかである。

しかしながら、その市民的合意は関心をもつことから始まるということを見ると、今

回の取り組みによって水質改善の必要性を多くの人々が感じたというのは、水質改善へのみちのりの一歩を歩んだということに言い換えることができるのではないだろうか。

水質が改善しなければ賑わいが産めない、ということ、賑わいができれば、水質改善への関心がたかまる。という関係は、にわとりとたまごの関係に他ならない。今回の京橋駐車場で社会実験をはじめ、さまざまな取り組みで市堀川への関心を高めることができた。そのことで、水質改善への関心喚起もできたとすれば、そのにわとりとたまごの関係を、実際に少しだけ超えたということがいえるのではないか。

むずかしい物事も、ちょっとだけやって見せることでちょっとだけなら動き出すことがある。まさに今回の社会実験を通して、受託した側はそのことに気がつき、今後のさまざまなまちなかの課題解決のヒントとして活用していくことが必要だと感じた。

→関心を高めることで実現する未来があるとすれば、今回の社会実験は関心を高める機会になったことは事実。これをいかに継続させて、にわとりとたまごの関係を超越するか、そしてそれにだれがどのようにこのよきサイクルにコミットしていくかが課題であり、まさに官民を超えて、この町をどのようにしていきたいかという『意志』がつくる未来を垣間見た機会となった。

8.10. かけた12のバリューの達成度合い

2016年度の水辺のまちづくり手法検討調査業務で作成した、市堀川で大切にすべき12の価値観にもとづいて、本年度の社会実験でなにが成し遂げられたかをまとめた資料が以下である。星が達成度合いを示す。

12のバリュー(価値観) 2018.02	短期	中期	長期	2018.02時点の評価
1 きれいな川、綺麗な水にしたい 豊かな自然環境にしたい (目標の修正が必要)	★ さわれる	★ 魚釣りが楽しめる	★ およげる 流れがある	未達/継続 自分事に思いうる人を増やし、全市的な取り組みへ成長させる必要がある。イベントをやることで意識を高めることはできた。
2 居場所作り	★ 椅子、本、ピクニック	★ サンドイッチもって座れる	★ 子供が安全に遊べる立ち止まりたくなる場所	社会実験期間中は達成 運営者の思いが通じ、人が寄りたくなる空間ができた。一方で、お店のためだけの場所だと勘違いする人がいたこともわかっており、改善する必要がある。
3 クルーズができる楽しめる街にしたい	★ イベントの船交通	★	★ レストラン船などの日常利用 日常使いの船交通	イベントの船交通は達成/ 達成したが課題がたくさんみえた。今後は、船のルートの環境整備、船の係留場所の確保、BtoCではなくBtoBのパートナーシップを模索し、さらに継続
4 緑の環境づくり	★ 芝生の広場 食べられるガーデン	★ 桜を植える 野花 食べられるガーデン		芝生ひろばの有効性を立証 その他は未達 船コースの緑化は進めたほうがいいのではないかな?
5 水上アクティビティがある街にしたい	★ SUP、カヌーなどの手漕ぎ	★ スワンボート、貸しボート	★ ウォーターポール ジェット、パワーボート、外洋へ	SUPの実証 SUP体験を実証。経済性確保に難があるが、コンテンツとしてはありえる。今後スワンボートなどを実証する
6 納屋河岸マルシェのにぎわいづくり	★ 短期的なマルシェの もりあがり	★ 日常的なマルシェ 開催 周辺の商業にも好影響をあたえる		PR告知がきちんとできているものは、集客ができた。 継続実施によって、集客につながる可能性があることはわかった。

12のバリュー(価値観) 2018.02	短期	中期	長期	2018.02時点の評価
7 歩ける水辺、走れる水辺。健康な水辺	★ 毎朝ウォーキング	★ ウォーキングをしたくなる環境整備 フットパスを町中にもつなげて整備	★ 日常でつかえる 水辺の道	未達/ ベビーダンスをやってくれた団体がいた。野天で貸出できるスペースがあると、ヨガやベビーダンスのインストラクターにとっては魅力的な空間になる可能性がある。
8 いろんなイベントがおこなわれる水辺であってほしい。	★ 花火、映画鑑賞	★ フェス。食フェス 水上パレード		イベント運営やイベント実施者への営業は手間と時間がかかり、中間団体にかかり負担がかかる。この人件費をどのように捻出するか、幅広い議論が必要に思える。
9 食文化が育まれる水辺	★ フードカー フィンガーフード	★ 川床	★ 牡蠣船	飲食店の経営を実施。継続運営されることで、その認知度はあがる。 一方、まちなかに客を送客できるようなコンテンツにはなっていない。 牡蠣小屋のようなコンテンツを試す必要がある。
10 和歌山レガシー	★ 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	★ 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	★ 和歌山の歴史とつなげる 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	未達/ 来歴に沿った水辺の新しい姿の模索は、周辺事業者などと協調し、あらたな事業をつくりだす必要がある。そのための戦略作りをすすめて、水辺ビジョンに盛り込む。
11 夜も楽しめる水辺	★	★ 夜も明るい	★ 飲み屋、BAR	実施済み。継続実施によるファンが増えることがわかった。明るい伝統がとれる風景が、安心感を生む。
12 学べる水辺	★	★ 学べる 学べる	★ 学べる	学びの機会が生まれ、提供する側も受ける側もどちらも満足度が高い。

これら、12 のバリューのうち、どのような企画をすると、それ自体がまちに集客を促す強力な『目的地になる』コンテンツになるのかということが、重要な指標として浮上したということが言える。都市における中心市街地が、集積することだけで求心力を生んできたことを考えると、その前提を度外視し、まさにその『集積をどのように促すか』、という課題を水辺が負うことができるのかどうかという課題と向き合うことに他ならない。

その観点からすると、来年度以降、いままでやってこなかったことで、『目的地になる』コンテンツになりそうなくつかの事象と、『目的地になる』ための環境整備のあり方を模索し、その実現性を議論したり実験したりしてみる必要がある。

→12 のバリューの達成度合いはばらつきがあるものの、達成されたものもあり、そのことで多くの知見が得られた。

→一方、12 のバリューを単に実現するだけではなく、『目的地になる』コンテンツの強さがあるかどうか、この場所には求められており、ひいては、中心市街地のあり方とかなり連動して議論が必要だということがあらためてわかった。

8.11. かかげた 8 つの仕組みの達成度合い

2016 年度の水辺のまちづくり手法検討調査業務でかかげた 8 つの仕組みの達成度合いは以下の通りである。

8つの支える仕組みと考え方	短期	中期	長期	2018.02時点の評価
A 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する	水辺へのアクセスのノード ここからさまざまなアクティビティに派生			棧橋利用の事業参入を引き続き誘致する SUPは実験済み。 技術のいらないスワンボートの実証の設置。
B 中間組織事務局提案			推進していくためのPPP のエージェント	中間組織運営は、自立経営できなかった。 かなり人件費、労力がかかる。これをどのように負担するのか、議論が必要。 協議会と中間組織は別組織のほうがいいのではないかと？地域の合意形成と運営が一体的でないほうが、よいのではないかと？
C 官民連携のフェスをおこなう	官民の連携のよい事例を積み重ねる ひとのつながりを作り続ける			民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになり、相互理解に役立った。
D 内川ファンドを含めた財源の確保			内川ファンドを含めた財源の確保	占用料の扱いを検討し、地域の魅力創出活動の財源になることが望まれるが、テナントからの家賃収入、イベント収入がどの程度見込めるかは現状は不透明
E メディア、PRを推進	メディア、PRを推進			十分PR期間をもうけて、専任のPR担当者を設置できる状況がのぞましい。PR目線でのイベント立案が重要（もちまきで実証）
F 民間不動産の活用推進もおこなう	リノベーションスクール			水辺座などのリノベーションスクール案件ができて、水辺に関する関心の高まりがうまれた。引き続き水辺にあらたなコンテンツがうまれるように、周辺事業者との協働をすすめる。
G 交通を考える		レンタル自転車 駐車場 バス		京橋駐車場周辺に歩く人がいないことがあらためてわかった。また、イベント時に車線にはみ出す人の安全確保など、道路交通に関する課題が発見できた。これを解決するためには、より広範囲な中心市街地のなかの交通計画が重要であり、交通行政と連動して課題解決に取り組む必要がある。
H 協議会をつくる	やってみなはれの精神			周辺の住民への音の問題による負担があることがイベント期間中に判明した。これを解決するために、ルール作り、意識の共有などを行う機関が必要であり、それを協議会が担うのではないだろうか？

A. 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する。

棧橋を設置したことによって、さまざまな利用と、さまざまなチャレンジは生まれた。

WASSUP による、SUP のレンタル事業は実施期間中毎日継続して行われ。これは大きな成果であり、このことによって、市堀川の水辺の特性がよくわかった。

SUP のレンタル事業は可能だが、初心者にはハードルが高く、もう少し裾野が広い簡易なアクティビティ（スワンボートのような）による事業をやってみてはどうかという意見がうまれた。棧橋利用の事業参入を引き続き誘致し、舟運利用も含めて、検討を続ける必要がある。

→棧橋がそもそもないと生まれない数々の取り組み。棧橋があることで、うまれる取り組みがあり、そこに可能性がまだみえているのであれば、継続的に実験的な棧橋を設置し、将来公設によるインフラとしての棧橋設置の必要性がうまれることを期待して、継続的に実験を行う。

B. 中間組織

中間組織運営は、今年度は収益を生まず、自立経営にむけてはハードルを感じるものがたくさんあった。

まず、イベント誘致や場所の告知、イベントの告知、資料作成、周辺の地権者、住民との調整、関心層との調整、連絡、伝達にかなり人件費、労力がかかることがわかった。しかも中間組織には能力として、『行政との折衝能力』⇨『民間ステークホルダーとの関係構築』、『デザインされた資料の作成』⇨『行政向けの報告書作成』、『現場でなんでもつくってしまうたくましさ』⇨『物事を戦略的に組み立て、計画通り進める能力』という、相反する能力がもとめられることが今年度わかった。これをすべて理解する能力がある人物を育てる必要性と、それを組織的に支える多様な人材を抱える必要性が垣間見えた。これらを運営するためにどれくらいのコストがかかるのか、試算が必要である。また、これをどのように負担するのか、幅広い議論が必要である。また、相反する能力を補完するため、この組織のなかには異なる出自の人材（民間でデザインをしてきたひと、イベントをおこなってきたひと、行政で職務経験がある人など）がそれぞれの経験を生かせるような人事交流の必要性もあるのではないかと考える。

また、今回協議会と中間組織は別組織のほうがいいのではないかと浮き彫りになった。協議会は地域の既存の価値観をもつ人々が、中心市街地をどのようにしていくかということ幅広く議論する場であるはずで、それを参考にとりいれて、実験的な取り組みをどんどんおこない、いままでなかった価値観をつくるという中間組織が目指す役割との違いが明確になった。本来、協議会があってその合意をもとに、中間組織が地域の価値を高めることを行うことが望ましいのだが、今回は中間組織が地域への説明を行う業務を担い、議論や機運が高まっていない地域のステークホルダーとの意見調整で地域の合意形成と運営が一体的でないほうが、よいのではないかと？

→中間組織は地域に『これまでなかった価値をつくる』という価値があり、それをどのように評価し運営に地域の資源を投下できるのか、幅広い議論が必要である。

C. 官民連携のフェスをおこなう

民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになり、相互理解に役立った。このことで、未来にあらたな価値をつくるという課題を解決するために必要な能力をお互いに補完しあえる関係を構築することができる。引き続き、相互の歩み寄りをおこなう機会をたくさんつくり、成果を上げ続ける必要がある。

一方、行政と民間が意思疎通を行うためにはむずかしい面もある。その意思疎通をおこない、円滑に物事をすすめるための、人的資源の投下は止むを得ず、このプロジェクトにおける、民間、行政の理解が進むことを望む。

→官民連携は、実績を積むことが大事。

さらに、その実績を幅広く共有し、さらなる理解がすすむことを望まれる。

D. 内川ファンドをふくめた財源の確保

長期目標としてかかっていた、財源の確保の課題であるが、実際実験をおこなうことで見えてきた課題がある。公共空間の占用料の扱いによって民間事業者からの収入得ることによって、地域の魅力創出活動の財源になることが望まれるが、テナントからの家賃収入、イベント収入がどの程度見込めるか、現状は不透明と言わざるをえない集客効果だった。今後、事業者がどれぐらいの収益を見込めるのかさらに事業企画をつくりながら判明していくものと考えられる。『これまでなかった価値をつくる』という価値が、共助的、公共的価値があるのではないかと考えられ、中間組織が将来地域の価値をあげるための組織として運営される時に、民間からの投げ銭的財源、公的財源投入も含めて、検討の余地がある。

→来年度以降、『これまでなかった価値をつくる』組織運営がどのようなものになり、なにをかかえて運営しだれがそれを担うのかを、どこまでの価値を高めることができるのかを検討し、そのコストがいかなるものなのか試算する。そしてその価値がどのような価値なのかを幅広く議論した上で、財源としてどのようなあものがありうるか、より深い議論ができる。

E. メディア、PR を推進

今回の社会実験の大きな反省点として、PR が不十分だったということがあげられる。PR にはそれなりの技量が必要であり、十分 PR 期間をもうけて、専任の PR 担当者を設置できる状況がのぞましい。また、単に企画を PR するのではなく、PR 目線でのイベント企画が重要であることが、「もちまきハロウィン」イベントで実証された。このような目線にたった、中間組織運営が必要であることがわかった。

→PR だけではなく、PR 目線のイベント、組織運営が共感と関心を生む。

F. 民間不動産の活用推進もおこなう

水辺座などのリノベーションスクール案件ができて、水辺に関する関心の高まりがうまれた。引き続き水辺にあらたなコンテンツがうまれるように、周辺事業者との協働をすすめる。とくに、『目的地になる』ことを水辺や中心市街地が目指すならば、事業者単体による開発ではなく、地域全体でそれを支援するあり方が必要なのではないかと考えた。地域としてポテンシャルを秘めた資源ととらえ、民間不動産の価値向上が地域の価値向上と直結しているというところに認識を高め、その役割を中間組織が担うということが未来像として想像できた。そして、先に掲げた「同時多発的な取り組み」を影で支えることで、地域にあらたな価値を生むことが求められているのではないだろうか。

→単に不動産事業を産めばいい、不動産事業のなかに事業コンテンツを埋めればいい、ということにとどまらず、その周辺の環境や、同時多発的な取り組みを支援する役割が必要である。

G. 交通を考える

京橋駐車場周辺に歩く人がいないことがあらためてわかった。また、イベント時に車線にはみ出す人の安全確保など、道路交通に関する課題が発見できた。これを解決するためには、より広範囲な中心市街地のなかの交通計画が重要であり、交通行政と連動して課題解決に取り組む必要がある。

→京橋駐車場の前の道路は、路肩の幅員確保によって、水辺を歩けるようにすべきである。

H. 協議会をつくる

周辺の住民への音の問題による負担があることがイベント期間中に判明した。これを解決するために、ルール作り、意識の共有などを行う機関が必要である。

また、そのルールを作る際に、このまちがどのような方向性のまちになるべきなのか、幅広い議論がまだ必要である。そのような議論をできる環境を、協議会が担い、未来にたいする責任を果たせる仕組みをつくり、その一端を行政だけではなく民間も担うために、中間組織をつくり、かれらに権限を委譲する、ということがひつようなのではないだろうか？

→来年度以降、地域が目指すべき未来を、幅広く議論できるひとびとによる協議会設立をし、運営を推進する。

8.12. 今後への提言

本年度の調査・検討事業によって、実際の都市空間上にあるべき未来像を提示した。そのことによって、あらたな検討すべき課題が見つかり、厳しい現実も突きつけられた。

このような取り組みをおこなうことが、地域にとって必要なことだという社会的議論喚起が十分なされたかという点、それは難しい。引き続きつづき、引き続きさまざまな主体を巻き込み、彼らのやる気をうまく活かすための組織運営がどのようなものなのかを続ける。それは、計画をたてたからといって、その計画通りに物事がすすむようなプロジェクト運営ではなく、即興的に断続的に意思決定をし続けなければならない。チャンスをつかむためには、民間経営と同じように、すばやい意思決定が必要であることが明らかになった。

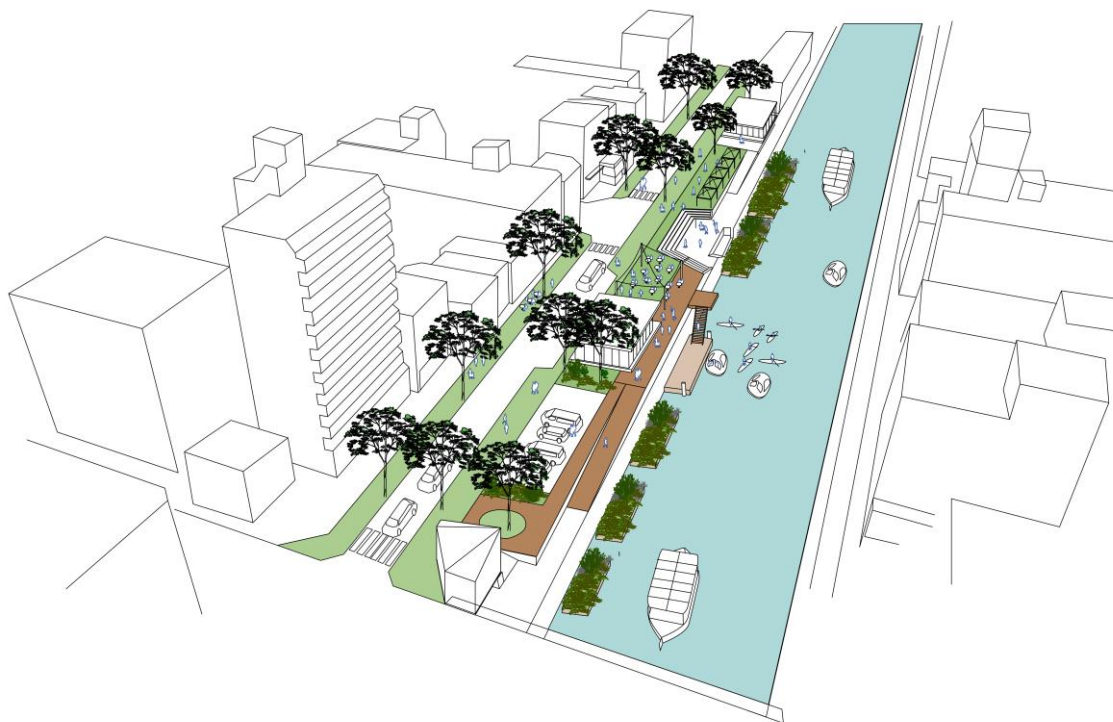
一方で、公共的価値を扱う以上、行政的風土との調整も必要である。

このような背反する価値に取り組むことがこれまであまりなかったことで、官民連携がなされてこなかった。これに果敢に取り組む、成果をあげることができれば、和歌山市の中心市街地はあらたな価値を得ることができる。

水辺は、公共空間であり、自然的価値があり、共通に取り組むべき課題である。人々の感性に訴えかける気持ちよさもある。さまざまな課題を乗り越えて人々が主体的に物事を考えて地域価値を高めるきっかけにするために、水辺はとても重要である。

今回の事業で、中心市街地が『目的地になる』必要があることが明確になった。そのために、来年以降3つの点を重点的に価値向上の取り組みをする拠点として提言する。

8.12.1. 京橋駐車場周辺



将来像



現状

京橋駐車場周辺が都市計画決定により都市公園へ整備されることが期待されている。

今回の社会実験をふまえた公園になることを望む。

・イベントができる広場：屋外で水辺空間の魅力を最大限生かせる屋外空間。テントや日よけが必要。今年度、配置が排他的、お店のための空間に見えたなど課題があった。大きさは現在の階段広場より多少大きい方がいい。人工芝あるいは、芝生がよい。また、階段の下面ならではの身の安全を確保できる魅力はあるが、道路面との接続もできる空間もあるとなおよい。

・コンセプション：コンセプションする事業者の意向が重要だが、1.屋外空間と接続されていて、空間に滞留するひとを可視化できているか、2.水辺を活かしているか（空間的、アクティビティ的に）、3.リピーターを生める運営ができるか？4.地域の価値を向上できるコンテンツか？5.セキュリティの確保とオープンさを両立できるか、という5点が求められる。コンセプションができるスペースも1店舗だけではなく、集積効果を狙い、いくつかあるとよい。

・バックヤード：広場でさまざまな活動を生むためのバックヤードが必要である。人件費をおさえるために、バックヤードから広場へのもの移動が簡便であることが重要である。

・植栽：高木が日よけと見通し確保、緑の癒し効果を生む

・駐車場：駐車場は必要である。コインパーキングの運営を行う。

・幅の確保：現状の駐車場のスペースだけでは、幅が狭い。可能な限り広げるために、一部の河川管理通路レベルをあげて広いスペースを確保できるとよい。その際、スロープの付け替えなどが必要になる

・栈橋：現状の仮設栈橋は安全確保に難がある。また増水時の対応も含めて、鋼管杭による固定など必要である。また潮位にあわせて追従する階段の設置などにより幅広い年代層がつかえる栈橋を目指す必要がある。舟運と貸しボート事業が両立する大きさの確保が課題。

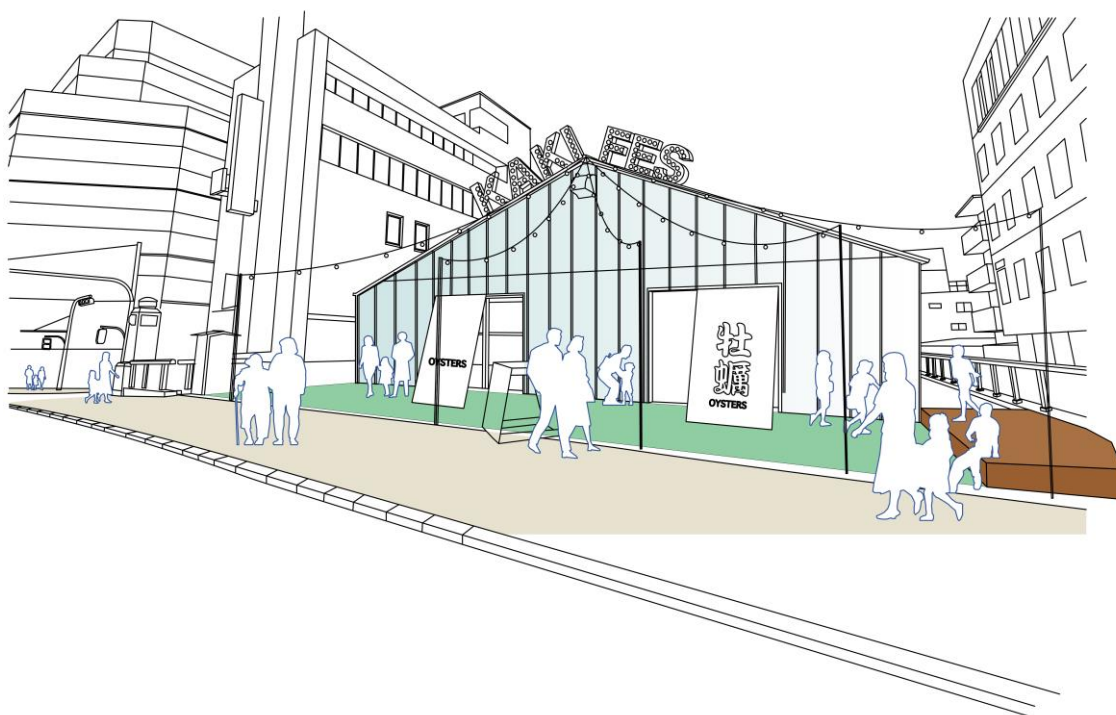
・浮島：水上に浮かべる植栽帯をもうけ、生物多様性を確保し、環境学習の場所として活かす。

・テント：日よけはとても重要である。仮設、常設を含めて、テントの構造に留意した配置計画が必要。

・レインガーデン：越流水（CSO）対策が必要な市堀川流域の課題を解決するために、地中浸透をうながす社会的機運を高めるための、レインガーデンを設置。

・道路の幅員検討：前面道路の全幅員うち、交通量に比べて自動車交通に使われる幅員が広いのが特徴である。これをみなおし、歩行者のための幅員確保を行い、自動車交通の通過速度抑制と歩けるまちの実現を行う。

8.12.2. 京橋



将来像



現状

戦前、牡蠣船が浮いていた京橋で、牡蠣を食べる風習を復活させる。これは集客効果が見込まれる。事業性を検討し、民間による収益事業の社会実験が必要である。場所は京橋の広場を利用する。京橋の広場も、河川占用によって設置されており、営利事業を行う場合は、オープン化の規制緩和の条件を整える必要がある。

8.12.3. 和歌山市駅周辺の水辺の緑被率向上



将来像



現状

富山市の松川遊覧船の事例を講演で聞き、緑にあふれた松川を遊覧する船の風景から触発され、公共空間である水辺に緑を植える必要があるのではないかと考えた。とはいえ、河川内にあらたに植えることは難しいので、大きなプランターを設置し、植えられる緑を確保することを目指す。設置される河川部分は **HWL** より高い部分であり、流量阻害がないと考えられるので、河川管理者と協議が可能なのではないかと考える。残念ながら潮の影響もあり、桜並木は難しいかもしれないが、潮につよい樹種を選定する。これによって、水辺の修景がはかられ、地域の水辺を活かそうとする機運が高まるのではないだろうか。また生物多様性にとっても重要なアシやヨシなどを植えることによって、生物多様性も確保できる。